左側頬粘膜部に発生した脂肪腫の1症例

内田 稔・河合 保・寺辺勝之・内田廣美
日比野好行・宮本康一・大里宏治・園山 昇

A case of lipoma on the left buccal mucosa

Minoru UCHIDA・Tamotsu KAWAI・Katsuyuki TERABE・Hiromi UCHIDA
Yoshiyuki HIBINO・Kouichi MIYAMOTO・Kouzi ŌSATO・Noboru SONOYAMA

結 言

口腔内には、種々な良性非歯系腫瘍の発生がみられるが、脂肪腫の発生頻度は、他の非歯系腫瘍に比較してまれであるといわれており、特に口腔領域に発生する脂肪腫は、発生頻度が低いものとされている。

このたび、わたくしたちは37歳の女性で「6」相当頬粘膜部に発生した大きさ小鳩卵大の無痛性の腫瘍を主訴に来院し、脂肪腫の診断のもとに摘出手術を施行、その概要を報告するとともに、過去15年間に当教室を受診し、臨床的にも病理組織学的にも脂肪腫と診断した9症例と、本邦での文献で渉猟し得た過去15年間にわたる51症例をもあわせ、その性別、年齢、発生部位、大きさなどについて検討したので報告する。

症 例

患 者： 37歳 女性。

初 診：昭和53年3月 日。

主 訴：「6」相当頬粘膜部の無痛性の腫瘍。

既往歴：特記事項はない。

家族歴：特記事項はない。

現病歴：約6年前より「6」相当頬粘膜部に大きさ小豆大の腫瘍を自覚したが疼痛がないため、そのまま放置していた。しかし、漸次その腫瘍が増大するため、某歯科医院を受診しそこより紹介され当教室に来院したものである。

現 症：体格、栄養はともに中等度であり、顔貌にも特別な所見は認められない。

口腔内所見：87615678の歯牙は欠損しており、「6」相

当頬粘膜部には大きさ小鳩卵大、周囲との境界明瞭な有茎性の腫瘍がみられ、その表面は健康な粘膜により被覆されている。触診すると腫瘍は弾力性軟で圧痛も認められない(写真1)。

臨床診断：脂肪腫。

手術所見ならびに経過：昭和53年4月に局所麻酔のもとに腫瘍部を被覆する粘膜に切開を加え、鉈的に剝離を行ったところ、周囲との癒着もなく比較的容易に腫瘍を一塊として摘出し手術を終了した。

術後の経過は良好であり、10か月経過した現在も、再

写真1

写真2

日本歯科大学歯学部口腔外科学教室第2講座(主任：園山 昇教授)

Second Department of Oral Surgery, Nippon Dental University, Tokyo (Chief: Prof. Noboru Sonoyama)

受付日：昭和54年2月23日

発の傾向は認められていない。

摘出物所見：摘出した腫瘍は大きさ $28 \times 16 \times 22$ mm とほぼ小鳩卵大で、重量 2.7 g、表面は黄赤色を呈し、弾力性軟であり、その断面は充実性無構造で、淡黄色を呈していた（写真 2）。

病理組織学的所見：H-E 染色では腫瘍は成熟した脂肪組織の増殖よりなり、それらの間に菲薄な結合組織線維が認められ、規則正しい分葉状を呈している。脂肪細胞

胞には異型性、多型性は認められない（写真 3）。

Sudan III 染色では橙色に（写真 4）、Sudan Black B 染色では黒色に染色された無数の脂肪滴が認められた（写真 5）。

以上の所見より病理組織学的にも脂肪腫と診断された。

考 察

脂肪腫は、MacGregor¹⁾によれば良性腫瘍の 4～5% を占めていると述べている。また口腔領域での脂肪腫の発生率は比較的少なく、Simpson²⁾は口腔内良性腫瘍 117 例のうち 7 例の脂肪腫を、また Geschickter³⁾は脂肪腫 460 例中、口腔領域のものは、わずか 3 例のみであったと述べている。本邦では朱雀⁴⁾が口腔領域における約 6 年間の病理組織学的検索を行った良性腫瘍中で、脂肪腫は 2 例であったと報告している。しかし間仁田⁵⁾は、1 年間に続けて脂肪腫を 23 例も経験したことから、よく注意して観察し、病理組織学的検討も加えるならば、案外見逃しているものもあると述べている。

そこでわれわれは過去 15 年間に当教室を受診し臨床的、病理組織学的にも脂肪腫と診断した 9 症例とともに、本邦の文献で渉猟し得た過去 15 年間にわたる 51 症例をあわせて性別、年齢、発生部位、大きさなどについて検討した。

性別について Geschickter³⁾は、男女比 2:3 で女性に多く、Seldin⁶⁾も、女性 14 例、男性 10 例と女性に多く発現していると述べている。これらに対して、Hatzio-tis⁷⁾は男性 68 例、女性 57 例と男性にやや多く発現していると報告している。本邦での文献⁸⁻²⁹⁾による脂肪腫は、男性 22 例、女性 29 例で女性にやや多く発現し、本学における症例も、男性 3 例、女性 6 例であり、症例数が少なく決定的なことはいえないが、本邦における文献と同様に女性に多発するのが認められる。

発生年齢別について、Geschickter³⁾は 30～50 歳台に多発し、その出現頻度は、55% であり、MacGregor¹⁾の報告でも 40 歳以上が約 70% を占めていると報告している。

本邦で渉猟した文献では 10 歳以下 2 例、10 歳台 3 例、20 歳台 3 例、30 歳台 6 例、40 歳台 11 例、50 歳台 5 例、60 歳台 10 例、70 歳台 11 例であり、40 歳以降に多発する傾向が認められる（表 1）。

本学における症例は、10 歳以下での症例はなく、10 歳台 1 例、20 歳台での症例もなく、30 歳台 1 例、40 歳台 4 例、50 歳台 1 例、60 歳台 2 例であり、症例が少なくもちろん決定的なことはいえないが、本邦における文献と同様に 40 歳以降に多発する傾向が認められる（表 2）。

発生部位については、Thoma³⁰⁾、Anderson³¹⁾、MacGregor¹⁾によれば、脂肪組織の存在する部位では、いかなる所でも発生するといっており、口腔領域における

写真 3

写真 4

写真 5

表 1 年齢ならびに性別による症例数

本邦での文献による脂肪腫 (51症例)

発症年齢	症 例 数	男 性	女 性
0～ 9	2	0	2
10～19	3	2	1
20～29	3	0	3
30～39	6	3	3
40～49	11	4	7
50～59	5	2	3
60～69	10	5	5
70～79	11	6	5
計	51	22	29

表 2 当教室の過去15年間ににおける脂肪腫 (9症例)

発症年齢	症 例 数	男 性	女 性
0～ 9	0	0	0
10～19	1	1	0
20～29	0	0	0
30～39	1	0	1
40～49	4	1	3
50～59	1	0	1
60～69	2	1	1
70～79	0	0	0
計	9	3	6

表 3 部位別発症率

本邦での文献による脂肪腫 (51症例)

発 生 部 位	症 例 数	発症率(%)
頬 粘 膜	20	39
軟 口 蓋	4	8
歯 肉	6	12
舌	10	20
口 腔 底	8	15
口 唇	3	6
計	51	100

表 4 当教室の過去15年間ににおける脂肪腫(9症例)

発 生 部 位	症 例 数	発症率(%)
頬 粘 膜	5	56
軟 口 蓋	2	22
歯 肉	1	11
舌	1	11
口 腔 底	0	0
口 唇	0	0
計	9	100

表 5 大きさによる症例数

本邦での文献による脂肪腫 (51症例)

大 き さ	症 例 数
鶏 卵 大	8
小 鶏 卵 大	2
鳩 卵 大	9
小 鳩 卵 大	10
雀 卵 大	14
大 豆 大	4
米 粒 大	4
計	51

表 6 当教室の過去15年間ににおける脂肪腫(9症例)

大 き さ	症 例 数
鶏 卵 大	0
小 鶏 卵 大	0
鳩 卵 大	0
小 鳩 卵 大	5
雀 卵 大	3
大 豆 大	1
米 粒 大	0
計	9

(表4).

大きさについては、文献により表現がまちまちであるが、一応、統一してみると、大きいものは鶏卵大から小さいものは米粒大までであり、雀卵大が最も多く14例で、次いで、小鳩卵大10例、鳩卵大9例、鶏卵大8例、大豆大4例、米粒大4例、小鶏卵大2例の順であり、鶏卵大から雀卵大程度のものが最も多く51例中で43例を占めている(表5)。

本学における症例でも小鳩卵大から大豆大まであり、小鳩卵大が5例で最も多く、次いで、雀卵大3例、大豆大1例であった(表6)。

脂肪腫は一般に頬粘膜、歯肉、舌、口腔底、口蓋および口唇などの部位に好発することが報告されている。

本邦で渉猟し得た文献によると頬粘膜が20例で最も多く、次いで舌10例、口腔底8例、歯肉6例、軟口蓋4例、口唇3例の順であった(表3)。

本学における症例でも頬粘膜が5例で最も多く、次いで軟口蓋2例、歯肉および舌がおのおの1例認められた

患者が腫瘍に気づいてから来院するまでの期間すなわち自覚期間についてみると脂肪腫は良性でその発育が比較的緩慢で、疼痛がないため、自覚期間は比較的長いようである。長い例では Bruce 氏³²⁾の21年, Smith³³⁾の17年, また最も短いものでは, Simpson²⁾の3週間であった。本症例は約6年を経過していた。

脂肪腫は、その実質が成熟した脂肪組織から成り、組織学的には単純性脂肪腫、線維組織の多い線維性脂肪腫、血管に富んだ血管性脂肪腫などがあり、さらに腫瘍組織内に化生骨組織を認めた化骨性脂肪腫もみられる³⁴⁾。本症例の場合は、成熟した脂肪組織の増殖よりなり、それらの間には、うすい結合組織線維がみられ、規則正しい分葉状を呈する所見が認められた。

本腫瘍の組織発生に関しては、田中ら³⁴⁾は諸家の報告から、組織の奇形を基盤にして生ずる組織異所発生説と正常組織の過形成によって発生する過形成説の2つに分類されると述べ、口腔領域では脂肪の多い所に発生していることから、後者の説をとるのが妥当であろうと報告している。

本腫瘍の成因については、慢性的刺激、内分泌失調、遺伝、外傷、結核症との関係、神経との関係等があげられているが、刺激説が最も有力な説と考えられている。Vazirani 氏³⁵⁾は頬部の咬傷から20年後に発生した症例を、Dixon³⁶⁾は、下顎の局部床義歯のクラスプの刺激から生じた症例を、また、Simpson²⁾は外傷による4例を、久野ら²⁹⁾は歯周疾患による慢性刺激と考えられる症例を報告している。

本症例においては、確たる成因は不明ではあるが咬合面に一致した頬粘膜部に発生していることから、咬傷などの慢性刺激が大きな誘因となっているように思われる。

結 論

このたび、わたくしたちは37歳女性で16相当頬粘膜部に生じた脂肪腫に遭遇し、病理組織学的にも検索を行い、同時に過去15年間に当教室で臨床のおよび病理組織学的にも、脂肪腫と診断した9症例ならびに本邦の文献において渉猟し得た15年間の51症例をあわせて、その性別、年齢、発生部位、大きさについて検討し、いささかの考察を加え、その概要を報告した。

本論文の要旨は第23回日本口腔外科学会総会（昭和53年9月14日）において発表した。

引用文献

- 1) MacGregor, A.J., Dyson, D.P.: Oral lipoma. OS OM OP 21: 770 1966.
- 2) Simpson, H.E.: Lipoma of oral cavity. OS

- OM OP 12: 349 1959.
- 3) Geschickter, C.F.: Lipoid tumors. Am J Cancer 21: 617 1934.
- 4) 朱雀直道, 他: 頬粘膜下に発生した脂肪腫の2症例. 口科誌 16: 499 1967.
- 5) 間仁田恭一, 他: 口腔の線維性脂肪腫について. 日口外誌 10: 231 1964.
- 6) Seldin, H.M., et al.: Lipomas of oral cavity. J Oral Surg 25: 270 1967.
- 7) Hatziotis, J. Ch.: Lipoma of oral cavity. OS OM OP 31: 511 1971.
- 8) 田縁 昭, 他: 舌に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 24: 575 1978.
- 9) 萩原 力, 他: 舌下部および顎下部にみた脂肪腫と皮様嚢胞. 日口外誌 14: 145 1968.
- 10) 市川辰己: 口底脂肪腫の1例について. 日口外誌 6: 534 1960.
- 11) 野井倉武憲: 舌に生じた脂肪腫の1例. 日本歯科評論 287: 97 1966.
- 12) 大井一正, 他: 口腔底に発生した巨大な Lipoma の1例. 日口外誌 8: 220 1962.
- 13) 林 四郎, 他: 口腔底脂肪腫の1例. 日耳鼻 65: 245 1962.
- 14) 高橋忠彦: 舌脂肪腫の2例. 日耳鼻 68: 1063 1965.
- 15) 小川克二: 舌脂肪腫1症例. 日耳鼻 66: 1580 1963.
- 16) 細川雅敏: 口蓋脂肪腫の1症例. 日耳鼻 67: 1041 1964.
- 17) 梶山 稔, 他: 脂肪腫の2例. 九州歯会誌 21: 34 1967.
- 18) 滝川富雄, 他: 口腔外科領域に生ずる脂肪腫について. 日大歯学 43: 472 1969.
- 19) 橋本賢二, 他: 口腔底脂肪腫の1例. 日口外誌 23: 837 1977.
- 20) 高野伸夫, 他: 頬部脂肪腫の2例. 日口外誌 23: 569 1977.
- 21) 中室嘉康, 他: 左側頬粘膜下に発生した単純性脂肪腫の1例. 歯科医学 36: 674 1973.
- 22) 関田俊介, 他: 脂肪腫の2例. 鶴見歯学 2: 69 1976.
- 23) 宇都宮和喜: 巨大なる脂肪腫の1例. 日赤医学 16: 246 1964.
- 24) 山田孝良, 他: 脂肪腫の2例について. 日口外誌 13: 348 1967.
- 25) 小淵貞夫: 口腔底に発生した稀有なる脂肪腫の1例. 長崎医会誌 31: 125 1956.
- 26) 山城正宏, 他: 頬部に生じた脂肪腫の2例. 口科誌 27: 97 1978.
- 27) 塩田重利, 他: 脂肪腫に関する臨床統計的観察. 口科誌 (第32回総会): A-1-42 1978.
- 28) 後藤 潤, 他: 舌にみられた骨・軟骨を有する脂肪腫の1例. 口科誌 (第32回総会): C-II-13 1978.
- 29) 久野吉雄, 他: 歯肉に発生した脂肪腫の1例.

- 日口外誌 19: 651 1973.
- 30) Thoma, K.H.: Oral surgery II. ed 5, Mosby Co, St Louis, 1969, p 950.
- 31) Anderson, W.A.D.: Pathology 1. ed 6, Mosby Co, St Louis, 1971, p 573.
- 32) Bruce, K.W., Royer, R.Q.: Lipoma of oral cavity. OS OM OP 7: 930 1954.
- 33) Smith, F.: Lipoma of the Tongue. JAMA 108: 522 1937.
- 34) 田中 順: 頬粘膜に生じた線維性脂肪腫の1例. 口病誌 28: 251 1961.
- 35) Vazirani, S.J., DeVore, D.T.: Fibrolipoma of the oral cavity. OS OM OP 11: 355 1958.
- 36) Dixon, W.R., Ziskind, J.: Lipoma of oral cavity. OS OM OP 9: 575 1956.
-